

# エジプト・ナイル川中流域のキリスト教社会

辻 明日香

つじ あすか / 川村学園女子大学、AA研共同研究員

かつてイスラーム過激派が活動し、いまだ外国人観光客がなかなか入ることのできないエジプトのナイル川中流域。この地方のキリスト教徒の生活から、エジプトの別の側面が浮かび上がる。

## エジプトの宗教は？

エジプトと聞いて真っ先に思い浮かぶことは、ピラミッドや砂漠、ツタンカーメンの黄金のマスクなど、古代エジプトの遺産だろうか。古代エジプトは多神教であった。古代エジプトの神々はその後どこへ行ってしまったのか、現在のエジプトの主要な宗教であるイスラームとの関係はあるのかなど、ふと疑問に思ったことはないだろうか。

エジプトの歴史は紀元前4000年頃まで遡る。その歴史の比較的新しい部分において、エジプトの宗教はめまぐるしく変化した。古代エジプトの人々が様々な神を信仰していたところに、紀元前3世紀以降のヘレニズム期、ギリシアの神々がやってきた。ローマ帝国の支配下に入ると、ローマの神々もやってきた。そして3世紀頃にはキリスト教がナイル川流域に伝播していき、5世紀頃には古代エジプトの神々が捨てられ、エジプトはキリスト教国となった。7世

紀に入ると、エジプトはアラブ・イスラーム軍に征服された。それから長い時間をかけ、エジプトはイスラーム教の国となっていった。

## エジプト人はみなスナ派イスラーム教徒？

現在、エジプトの人口の大半（ある統計によると86.8%）はスナ派のムスリム（イスラーム教徒）である。しかし、キリスト教徒が10.2%おり、その他にシーア派ムスリムが2.9%、残りの0.1%にバハーイー教徒やユダヤ教徒などがある。エジプトにはキリスト教徒が十人に一人はいることに驚かれるのではないだろうか。このキリスト教徒の大半はエジプト土着の教会であるコプト正教会の信徒（以下コプト）であるが、その他にもコプト・カトリック、プロテスタント系諸派の人々がいる。エジプトでもし複数のキリスト教徒に会っても、彼

らが同じ宗派に属しているとは限らない。ムスリムにも、スナ派とシーア派がいる。現在シーア派ムスリムは弾圧されており、その姿は見えにくい。スナ派の中でも、スーフィー教団に属する人々、ムスリム同胞団に属する人々など様々である。古代エジプトから続く慣習を大切にすることもあれば、それを「反イスラーム的」として嫌がる人もいる。ある先生の表現を借りるならば、ムスリムの色である緑の濃淡は様々である。

## ナイル川中流域のキリスト教社会

地方におけるコプトの人々の生活をみることで、あまり知られていないエジプトの側面を紹介したい。カイロの南方からルクソールの北方あたりまでのナイル川中流域（中部エジプト）は、かつてイスラーム過激派の拠点であったこともあり、いまだ外国人の観光が制限されている地域である。同時に、この地域はエジプトのなかでもとりわけキリスト教徒の人口率が高い。筆者は2013年2月に、この地方の中心部の一つであるアスユート市（カイロ南方375km）周辺の修道院や教会を訪れる機会があった。ナイル川中流域は宗教間対立や教会襲撃な



ムハツラク修道院にて、集まった人々を祝福するタドロス教皇（2013年2月）。

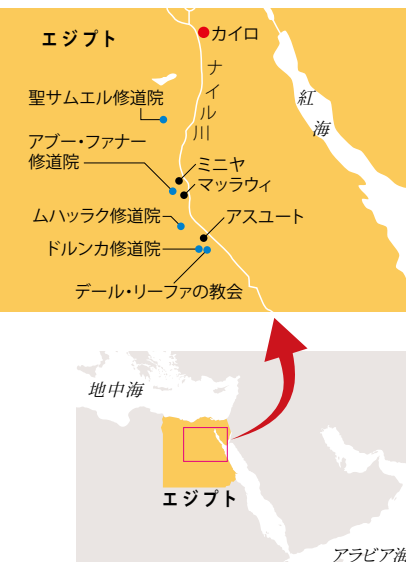
写真はすべて筆者撮影



アブー・ファナー修道院再興の立役者であり、大勢の崇敬者を集めるデミトリウス主教（左下の黒衣の人物）。

砂漠のなかのアブー・ファナー修道院（マツラウィ市近郊）。十数年前までは廃墟であった。





どの事件が多く、キリスト教徒が迫害されているようなイメージを抱きがちであるが、実際に行ってみると、それとはやや異なる世界が広がっていた。

#### 復興する教会や修道院

ナイル川中流域には、現在使用されているものと廃墟となっているものを含め、多数の教会や修道院、僧房（跡）が存在する。砂漠や集落のなかに独立して建っているものもあれば、古代エジプトの墓や石切り場、自然の洞窟を転用したものもある。聖家族（幼子イエスと両親）が訪れたとされ、中部エジプトで最も重要な修道院はムハツラク修道院（アスユート市北方）である。この修道院は広大な農地を所有し、また巡礼客に対応するために修道院外部の労働者を多数雇っており、修道院周辺地域の雇用を支えているという。筆者が訪れた2013年2月はちょうど新しく選出されたコプト教皇がこの修道院を訪れたときであり、一目教皇を見ようと、コプト、ムスリムを問わず人々が修道院につめかけていた。

ムハツラク修道院は中世から人が住み続けている修道院であるが、ナイル川中流域には一度廃墟となったものの、近年再整備された教会や修道院も複数存在する。例えば砂漠のなかに位置するアブー・ファナー修道院（マツラウィ市近郊）は、20世紀末にこの地方の主教によって再興された。現在は古代からの修道院の周辺に来客者向けの食堂などが建てられ、週末は地元の人々や観光客でにぎわっている。

同じく20世紀末に大拡張が行われ、突如としてエジプト有数のコプト巡礼地となったのはドルンカ修道院（アスユート市近郊）である。この修道院にある教会は古代エ

ジプトの石切り場を利用して建てられた教会として有名であり、聖家族が訪れたという伝承もあったが、近年までは山の中腹にひっそりと建つ修道院であった。20世紀後半に聖家族がエジプト逃避行中に立ち寄ったとされる場所をめぐる巡礼（観光）ブームが起こると、この修道院は聖家族が立ち寄った最南端の場所とみなされ、新しい教会や巡礼者用の宿泊施設などが建設されるなど、巨大な修道院へと生まれかわった。このように、ナイル川中流域のキリスト教社会は長年にわたる迫害により衰退した面がある一方、活性化している面も見られる。

修道院の拡張にともない、修道院の麓のデール・ドルンカ村には他地域から大勢の人々が移り住んできたという。その中にはムスリムもあり、村には新しいモスクも建てられたが、彼らはキリスト教徒と暮らすことに慣れておらず、様々な軋轢が生じていると聞いた。ナイル川中流域における宗教間の対立は、ずっとそこに存在したものもあるかもしれないが、近年生じたものもあるのである。

#### テロの対象、ツーリズムの

##### 対象としての修道院

2013年夏、ムルシー大統領失脚後の混乱のなか、エジプト各地で教会やキリスト教徒の家の放火や略奪が起こった。紹介したムハツラク修道院やその周辺の村々も被害を受けた。2017年5月には、ミニヤ市の

北西の砂漠地帯にある、聖サムエル修道院にむかう観光バスが襲われ、28名の死者がでた。聖サムエル修道院も近年再整備された、豊かな農地をもつ修道院である。犯人グループはバスがハイウェイから降りて、携帯電話の電波が届かなくなる地点で待ち伏せしていたらしい。報道によると、襲撃に怯えながらも、修道院で働く地元の人々は次の日も修道院を目指した。開発から取り残され、エジプトのなかでもとりわけ失業率の高いナイル川中流域では、修道院はキリスト教徒にとってもムスリムにとっても雇用をもたらす場であり、日々の疲れを癒す行楽地でもある。

テロで修道院の復興が止む可能性もあるが、そうはならない兆しも見られる。エジプト政府は、聖家族逃避行の地を新たな観光の柱とし、外国人観光客を呼び込むキャンペーンを開始したらしい。これは上述した巡礼（観光）ブームを、エジプト人以外にも広げようとするものである。観光の目玉にはこの記事で紹介した修道院も含まれている。現時点ではナイル川中流域の観光に制限があるかもしれないが、キャンペーンが軌道に乗り、制限が解除された暁には、みなさんにも是非、ナイル川中流域を訪れ、そのキリスト教社会を見ていただきたい。少数派に目を向けるには、まず彼らに対するイメージを変えるところからはじまる。その手始めとして、巡礼客でにぎわうエジプトの修道院を訪れてみることはどうだろうか。



ドルンカ修道院（アスユート市近郊）。近年、巨大な建物群として生まれ変わり、周囲を威圧している。



古代の墓のなかに建てられた聖処女教会・聖タドロス教会（アスユート市近郊、デール・リーファ村）。